

ベアレンツキャンプ 水野先生



拝啓 寒い日々が続いておりますが、水野先生はじめベアレンツキャンプの皆様方にはいかがお過ごしでしょうか。


さて、この度、1年5か月間のベアレンツキャンプのご支援を卒業させていただきました。そのご支援に心からお礼申し上げますとともに、私達家族が、今、幸せでいられますのも、ベアレンツキャンプの皆様方のお力添えのお陰と深く感謝申し上げます。

顧みれば、我が子 ■■■が中学校に行かなくなったのは、一昨年6月の始め頃でした。それ以前の5月には、塾を休むことがありましたが、初めての中学校生活の疲れとっていました。

その6月始めに弟の■■■と喧嘩をしている中、父親の私が仲裁に入り、私との言い争いが深夜まで続きました。

翌朝、「頭が痛い」と言い、私も「昨夜、遅くまで言い争っていたから」と安易な気持ちで学校を休ませたのですが、二日目の朝も「眠いし、まだ頭が痛いから休む」。三日目以降も「頭が痛いから…」と行って、病院の受診を促しましたが「うるさい。あっちにいけ」と大声を張り上げて拒み、学校を休み続けるよ








うになりました。

小学校の頃は、クラスの中心的存在で学級委員までやり、かつ勉強面や生活面も非常にまじめ、今まで私の注意や叱責に反抗もせず、俗にいう「いい子」(この考えは後に間違っていると気付きました)であった我が子の態度が急変し、何を言っても反発する●●の姿は、私達夫婦には受け入れられないものでした。

当然、学校に行かないことから生活のリズムも崩れ、起床は午前11時頃、寝るのは午前1時を回ってから。ゲームをしたりテレビをみてばかり、その合間に昼寝という状況で、次第に担任や生徒指導の先生が訪問しても顔を合わせず、自宅に引きこもるようになっていきました。


生徒指導の先生とも幾度となく相談し、「学校にカウンセラーがみえるので、一度親御さんだけでいいのでカウンセリングを受けては」との話をお聞きし行ってはみたものの、結局は「今暫く様子を見ましよう」と。「今回は、本人と話がしたいから、一度連れてきて欲しい」との話がありましたが、本人は「カウンセリングなんて行かない」と言う中、まして行くことのできない学校へなど連れていくことなど不可能な状況でした。







●●も時折「もう、そろそろ行かないと…」、「来週から行く」とか「7月になったら行く」と言うものの、結局行かない状況が続き、夏休み前には「今更、行けるわけねえ!」と大声を張り上げて私達夫婦を罵倒したり、寝ている弟を殴る、蹴るようになっていきました。今から思えば、学校へ行くことのできないイライラを爆発させていたのかもしれませんが、その時には、●●の気持ちを理解することができませんでした。

そんな中で夏休みとなり、ある人から、ペアレンツキャンプという名前をお聞きしました。すぐにインターネットで調べ、ホームページをくまなく読ませていただくと同時に、水野先生の本を購入いたしました。今まで私達夫婦がしていた「しつけ」という名での先回り、過干渉、親の価値を押し付けていたことが、●●の成長・自立を妨げていると私ながらに解釈し、無理矢理「よい子」にさせていたのだと気付きました。



早速、メールにてご相談し、早々に山下先生からの長いご返事をいただきました。たった少しの相談内容であったにもかかわらず、●●の性格を捉えての踏み込んだ分析をされたご返事だったと記憶しております。






その後、最初の電話カウンセリングにおいて、後々、担当していただいた佐藤先生とお話をさせていただき、「復学させることは難しいことではない。ただし、継続登校できるのかは、家庭内の対応が鍵となります。それが非常に大変ですよ。それ相応の覚悟が必要なので、一度、夫婦で良く話し合ってから支援を受けるのかどうか決めてください」とのお話がありました。


佐藤先生の話を聞き、私達家族や●●の今後の人生を考えたときには、ベアレンツキャンプにお願いするしか他に術は無いと考え、妻にその旨の話をしました。


妻は、最初は「他人に頼るのはどうか。」と躊躇しつつも、私の考えに同意(渋々だったのかもしれませんが)し、問題解決支援コースをお願いすることにいたしました。

やはり、渋々？同意した妻の対応から、実際に支援が始まった当初、佐藤先生からは「もう少し夫婦の意思統一を図ってください！じゃないと、支援は難しいですよ。家庭教育支援は、父母の立場関係が重要で、特に、普段子供と接する機会の多い母親の役目が大切ですから」と仰られ、改めて妻と話し合いをもちました。



●●その頃は夏休みも終わり、私達夫婦が「もしかする






と、夏休みが明けたら学校へ行くかもしれない。」と淡い期待を寄せていた時期だったのですが、結果、それも叶わなかったこともあり、妻も「我が子のためなら」と前向きに捉えるようになりました。


そうして支援が本格的となり、まずは、妻が家庭内での会話を家庭ノートに記録することから始まりました。


ノートを提出し、それが戻ってきた時には、私達夫婦の二人の子供へのメシテイ（命令・指示・提案）が非常に多いこと、家庭内での父母の立場逆転などの指摘、こうした状況にはこうした言い方が良いなどの添削がびっしり朱書きされており、殆ど1ページ全てが真っ赤なところもありました。水野先生の本を読んで注意はしているものの、なかなかそれが実践できないでいる中、家庭教育ノートの添削を見て、より一層注意しながら子供へ接するように夫婦とも努力していました。

ところが、●●は、弟への暴力が益々エスカレートし、かつ私達夫婦にも蹴る、殴るといった行為を繰り返すようになってきました。



加えて、9月終わり頃からは、弟の●●までも「お兄ちゃんが学校へ行かないから、僕も行かないし、行きたくない」「学校へ行くのは嫌だ」と毎朝、玄関先






で泣き出すようになってしまい、俗に言う『行き流り』状態になってしまいました。


本来なら、ここで子供の気持ちに寄り添うことが必要だったのに、泣く[]を無理矢理車に押し込め、学校へ連れていくという母子登校の日々が続くにつれ、次第に焦燥感に苛まれ、妻は体力的にも精神的に不安定な状況に陥り、病院通いを始めるようになってしまいました。


そうしたことで、家庭内での対応がしっかりできていない状況にもかかわらず、このままでは妻がダウンしてしまうという佐藤先生のご判断からと推察いたしますが、少しの冷却期間を置いた後にダイレクトアプローチが設定され、[]へ教育コーチングをしていただきました。

水野先生と佐藤先生からの教育コーチングで、[]は、「やはり学校には行きたい。でも、今となってはなかなか行けない」と涙ながらに話し、私にも「今まで迷惑かけてごめんなさい」と謝りました。その時の顔は、昔の[]の顔に戻っていたように感じられました。



そのコーチングの後、学校への復学までの間は、辻先生、山下先生、そして[]先生の訪問カウンセリングを受け、[]に寄り添い、復学への緊張や不安をや








わらげ、励ましていただきました。先生方の訪問時には、窓から何度も外を覗き、先生方を待っていたようで、■■■自身も先生方を心底から頼りにしていたのだと思います。

そして、復学日の当日は、早朝から佐藤先生の教育コーチングを受けた後、久しぶりに私達夫婦に「行ってきます」と言い残し、自転車に乗り自宅を出ていきました。辻先生の伴走を受けながら学校へ向かい、辻先生の方を振り返りながら校門をくぐっていったそうです。その報告を受けたときには、涙が溢れて「ペアレンアツキキャンプの支援があってよかった」と夫婦で喜び合い、家族の中では忘れることのできない日となりました。

その後の継続登校期間中も、辻先生には、度々我が家に足を運んでいただき、■■■の学校での様子や勉強について確認していただくとともに、部活での悩みに対しても対応していただきました。直接、私達夫婦に話しづらいことを、辻先生の力を借りて私達に話をするという場面を何度もつくっていただいたことで、■■■自身も心に引っ掛かるものが無く、結果として、継続して学校に行くことができたと思っております。





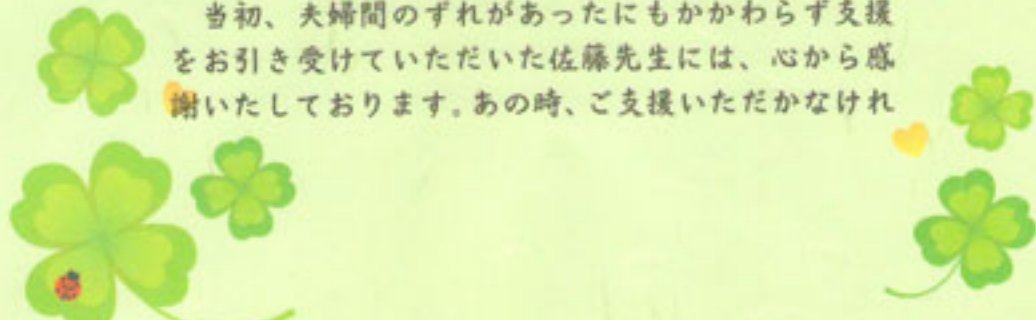
復学してから早いもので1年を経過し、体調不良で休んだ以外には学校へ行くことができ、■■■を担当して下さった生徒指導の先生をからかうなど、楽しく学校生活を送っているようです。

担任の先生からも、授業や勉強に真面目に取り組んでいて、普通の生徒と全く変わらない状況ともお聞きし、昨年は参加できなかった体育祭もクラスメイトと楽しく、また真剣にやっていたようです。


また、あれほど玄関先で泣きじゃくり、行き渋りをみせていた弟の■■■も、兄の教育コーチング以降、魔法がかかったかのように、毎日、歩いて学校へ行くようになりました。■■■に対しては教育コーチングされていないのに、この変化には驚きました。

多分、教育コーチングの後に「兄ちゃん、もうすぐ学校へ行くからナ…」と弟に話したからかもしれません。

それ以降は、毎朝「行ってきま〜す」と手を振り、自宅を出ていきます。この様子を見るにつけ、これが本来の姿だと思うのと同時に、これが「幸せ」なんだということを毎日感じとっています。



当初、夫婦間のずれがあったにもかかわらず支援をお引き受けいただいた佐藤先生には、心から感謝いたしております。あの時、ご支援いただかなけれ



ば、今頃、家族はどうなっていたのかを想像すると本
当にお礼の言葉もございません。

こうした中での卒業となり、1年5か月という長期に渡りご支援をいただいたため、皆様とお別れするのは非常に寂しい限りですが、また折に触れて二人の成長の姿をご報告できたらと思っております。

子供たちが社会に出るまでには、まだ多くの歳月が必要です。今後、家族だけで歩いていくと思うと不安が残りますが、ペアレンツキャンプで学んだPCMの理論を改めて確認し、家庭教育を継続していきたいと考えております。家庭教育には、終わりがありませんから…。

ご支援をいただいた水野先生はじめ、佐藤先生、辻先生、山下先生、 先生、今後も全国を飛び回られ、私達家族同様に支援を必要とするご家庭を訪問なさると思いますが、くれぐれも健康にはご留意され、益々ご活躍されることを心からお祈り申し上げます。今までのご支援、本当にありがとうございました。

敬具



平成27年2月8日